

大岡昇平『俘虜記』・『レイテ戦記』論

新宮 美佳子

はじめに

「歴史」と「文学」という問題を定義するとき、「歴史」は「事実」であり、「文学」は「虚構」であるという二分法的概念が用いられることがある。しかし、「歴史」と「文学」を、「事実」か「虚構」か、という概念を用いて区別しようとする試みは、「歴史」あるいは「文学」という語彙の成り立ちからみると、必ずしも正しいとは言えない。

「歴史」は過去に起こった個々の出来事を示すとともに、「記録」という意味が付与されている。T・イーグルトンによると、十六世紀から十七世紀前半にかけて、英国における「ノヴェル」は、「事実」と「架空」の両方に用いられていた。つまり、「歴史」と「文学」の境界は極めて曖昧なものであったと言えるだろう。

小説の枠組みの中で「歴史的出来事」を語ろうとする際、「事実」として残されたものに沿った叙述を行いながらも、決してそれだけに縛られないフィクショナルな叙述が許容されている。この「事実」と「虚構」の混在こそが、近代以降派生した「歴史小説」というジャンルにおいて、「事実」と「虚構」の優劣の問題を生み出した。

しかし、「歴史的出来事」に意味を付与し、復元する「歴史記述」

を始め、あらゆる記述は基本的に再構築されたものであり、その時点で既にフィクション化が行われているのである。したがって、「出来事」を言語行為によって再構築すること自体が批判の対象となるのではなく、どのように再構築されたのかという記述生成の方法こそが重要であり、「歴史的出来事」をどのように語っているのかという語りのスタンスの問題に帰結するのである。

「歴史」は語られるものであるという意識のもと、「歴史的出来事」を題材にした小説を執筆したのが大岡昇平である。大岡は「歴史的出来事」を語る手法の一つとして、徹底的な叙述の相対化を提唱した。本稿では、大岡昇平の『俘虜記』及び『レイテ戦記』に着目し、大岡が用いた叙述の相対化の手法について検証していく。

一、『俘虜記』の手法

『俘虜記』は、「捉まるまで」が「俘虜記」と題して一九四八年二月に雑誌『文学界』に発表されたことを皮切りに、「サンホセ野戦病院」が同年四月に『中央公論』、「タクロバンの雨」および「パロの陽」が『レイテの雨』の題で同年八月に『作品』、「生きている俘虜」が一九四九年三月に『作品』、「戦友」が同年三月に『文学界』、

「俘虜の季節」が「季節」の題で同年七月に『改造文芸』、「建設」が同年十月に『別冊文芸春秋』、「外業」が同年十二月に『改造』（なお「建設」と「外業」は単行本収録時に改稿され、「労働」の題で収録される）、「八月十日」が一九五〇年三月に『文学界』、「新しき俘虜と古き俘虜」が同年九月に『文芸春秋』、「俘虜演芸大会」が「演芸大会」の題で一九五一年一月に『人間』、「帰還」が一九五〇年十月に『改造』、「西矢隊始末記」が一九四八年十二月に『芸術』に、それぞれ発表された。これらを合わせた合本『俘虜記』は、一九五二年十二月に創元社から刊行され、これが今日における『俘虜記』の源となっている。内容はマラリアを患った兵士——「私」——がフィリピンミンドロ島の山中を彷徨し、米軍の俘虜となった後に帰還するまでを描いている。

『俘虜記』は「捉まるまで」から「西矢隊始末記」までの十三章に渡って展開されるテキストである。一章から十二章までは「私」という一人称の語りが徹底して用いられている。その時点で『俘虜記』は既に一方的な偏った語りにならざるを得ない。一方で、十三章目に該当する「西矢隊始末記」では、「自分」という記録者が設定されているもの、時系列に沿った「歴史的事実」の列挙に努めている。つまり『俘虜記』は、一人称の語りによる物語の章と、記録的要素を強く持つ章との両面性によって成り立つテキストであるのだ。

『俘虜記』について大岡は、あとがきの中で次のように述べている。本書は既刊『俘虜記』『続俘虜記』『新しき俘虜と古き俘虜』の中から、一連の俘虜の記録を集めたものである。

『俘虜記』はこれら作品全体のための題であった。（傍線論者）

大岡が「記録」と述べたことを理由に、一般読者は「私」を大岡自身であると錯覚し、結果『俘虜記』は大岡の出征記録であるかのような評価が浸透した。しかし、『俘虜記』における「私」は、作者大岡が自己を投影した語り手として「私」を設定しているだけであり、メタフィクショナルな作者にすぎないことを忘れてはならない。

大岡は『俘虜記』の中で「しかし私は自分の物語があまりにも小説的になるのを懼れる」（「生きている俘虜」）と書き記している。大岡自身が「物語」という言葉を使用しているように、『俘虜記』はあくまでも「物語」なのだ。「小説的になるのを懼れる」という言葉は、『俘虜記』が大岡の戦争体験として神話化・特権化されることにより、戦争下における人間の矛盾等を相対的に語るというモチーフが消失していくことを懼れたことを意味するのではないだろうか。つまり大岡は、『俘虜記』が自己の戦争体験の「記録」、あるいは大岡の出征記録物語として特権化されることを懼れたのである。『俘虜記』の小説性を否定したわけではないのである。

前述のとおり『俘虜記』はしばしば「小説」と「記録」という評価にさらされているが、この問題について堀井正子氏は「作品の小説性と記録性について——『俘虜記』の場合——」¹⁰⁾の中で次のように述べている。

「俘虜記」は全体としてみれば、作者大岡の出征から復員までの一連の経験を背景とした記録的作品である。この記録的性格は、かなり重なる時期に書かれた「野火」の小説と呼ぶしかない作品と比較すれば明らかである。

しかし、「俘虜記」を構成する十三の章を各章ごとにみれば、

それらは決して均一な記録性を持つてはいない。冒頭の「捉まるまで」は小説作品として衆目の一致するところであり、最後に置かれた「附 西矢隊始末記」は極めて記録性の強い作品である。この両章を両極において、間の各章は、各部分ごとに濃淡はあるが、「捉まるまで」ほどの小説性も「西矢隊始末記」ほどの記録性も持たない記録的作品となっている。

しかし、この記録の性格は、小説作品の一形態としての記録性であって、歴史著述や記録文書の類とは明らかに異質なものである。(傍線論者)

堀井氏が指摘するように、『俘虜記』はあくまでも「小説作品の一形態としての記録性」であるということを決着をみている。むしろここで論じたいのは、『俘虜記』が大岡の出征体験を題材にしていくという単純な理由により、すなわち記録性を抱えるということではなく、一人称の語りという小説性の中に記録性が組み込まれるということは、一体どのようなことなのかという点にある。この問題を考えるにあたり、「私」によって語られる章にはそれぞれ「語り」の特徴があるが、最も「小説的」であると評される「捉まるまで」を主軸とし、以下考察していく。

「捉まるまで」は、一貫して「私」の語りによって進行する章である。その語りの方法を分析するにあたり、次の引用部に注目したい。

①中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞った。彼は小屋に充滿している病人を眺め、黙って戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いていた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長

の決意を非難する口吻を洩らした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局こうして病人が増えて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を不落の安全地帯と見做す近視眼的前提が含まれていた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかかる楽観的予測を抱懐し得たはずはない。(傍線論者)

②我々はキャンプにでも来たような気持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の山人(これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い異人種で、戦争に無関心である)と馴れて、赤布、アルミ貨等を与えて芋、バナナ、煙草等を獲た。我々は時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやって来た。マラリアである。(傍線論者)

先の引用部から、「私」は批評行為を行っていることが明らかとなる。一人称の語りとは、単一の視点で切り取られていて、客観性を欠きがちであるとされるが、「私」は見たこと、聞いたことを詳細に語り尽くした上で、自分の語っている事柄に対して批評を行っている。それはつまり、一人称という偏った語りを自覚しながらも相対化を試みる「一人称相対叙法」にあたるのだ。

「一人称相対叙法」の方法として、①と②に使用される方法が挙げられる。一つは①に代表されるように、徹底的な観察を行い、そ

れに批評を加えていく方法である。①では中隊長と分隊長の間に生じた作戦上の意見の相違を取り上げ、「下士官のエゴイズム」「かかる楽観的予測を抱懐し得たはずはない」と、両者に批評を行うことにより、二人の論争を相対化している。二つ目は②に表れるように、ある「事実」に対し、別の「事実」を提示して相対化を行う方法である。②では、一見すると安定した戦場生活であるように語りながら、次の瞬間には「しかし」という逆説をもって、その「事実」を覆す別の要因を語ってみせている。①及び②ともに『俘虜記』によって度々見受けられる手法であるが、これこそが偏った語りであることを自覚しながらも相対化しようという叙述方法であるのだ。

前述のとおり、「私」は視点人物として徹底的に自らの周囲を観察しているが、「一人称相対叙法」によって相対化される対象は、「私」から見た他者だけでなく、「私」自身も含まれる。これが『俘虜記』における語りの最大の特徴である。具体例として、次の箇所を引用する。

私は溜息し苦笑して「さて俺はこれでどっかのアメリカの母親に感謝されてもいいわけだ」と呟いた。

私はこの後度々この時の私の行為について反省した。(中略)
私は自然に銃の安全装置をはずした手の運動を思い出す。してみればこの時私が確実に私の決意を実現し得たのは、ひたすら他方で銃声が起り、米兵が歩み去ったという一事に懸っている。これは一つの偶然にすぎない。

私の決意に照して見れば、この時の私の行為は完成されていない。従ってそれに関する私の反省も当然未完成たるべきである。しかし私は一応私の決意が何処まで私の行為を導き得たか

を、この時の私の心理に求めずにはいられない。

これは、米兵の存在を認知した「私」が、何故彼らを撃たなかったのかについて批評を行っている箇所である。「私」は当初、「生涯の最後の時を人間の血で汚したくない」という思いから、米兵を撃つまいと決めていた。しかし実際に米兵が現れたとき、「私」は銃の安全装置をはずしたのである。米兵が立ち去ったため、最終的に「私」は米兵を撃たずに済んだ。このことに対し、「私」は、「さて俺はこれでどっかのアメリカの母親に感謝されてもいいわけだ」と呟いた。この場面は米兵と遭遇した「私」が、その時どのような心理状態にあり、何を発言したのかが「物語」として忠実に再現されている箇所である。ここで注目したいのは、撃たないと決意しつつも安全装置をはずしたこと、それにもかかわらず、結局は撃たなかったという一連の行為に対し、「私」が「反省」と題した「批評」行為を行った点にある。「私」が批評の対象としているのは、生死のやり取りという極限下における心理状態である。「私」は、このような心理状態を情緒的かつ感情的に語ることもできただろう。しかし「私」は、あえて客観的かつ冷静な批評を行うことによって、乱れた思考と感情をそのまま提示しているのだ。

「私」の一定しない心理状態が批評の対象となる点をさらに考察していくにあたり、次の箇所を引用する。

①私は生涯の最後の時を人間の血で汚したくないと思った。(中略) 私のこの最後の道徳的決意も人に知られたいという望みを隠していた。

②むしろこの時人間の血に対する嫌悪を伴った私の経験に照して見れば、私はここに一種の動物的な反応しか見出すことは

出来ない。「他人を殺したくない」という我々の嫌悪は、恐らく「自分が殺されたくない」という願望の倒錯にほかならない。

①は米兵に遭遇する以前の「私」の感情である。この時、「私」は自らの決意を道徳的であると意味付けている。しかし、実際米兵に遭遇したときに「私」が抱いた感情とは、①のような道徳的なものではなく、②に示される動物的な反応であったのではないかと分析している。このように「私」の批評は感情の矛盾をも対象としている。「俘虜記」にはこのような描写がしばしば見られるが、安定していない感情を逐一批評することこそが、『俘虜記』という小説の中に表れる記録性であるとみなすことも可能なのではないだろうか。何故ならば、一人称という単一の視点でありながら、戦争が人間の心理や思考をいかにして屈折させるのかという内面的な問題を、批評行為を通じて忠実に再現していると言えるからである。特に戦場という極限状態においては、一瞬の偶然によって思考や感情が左右・逆転していくのは勿論のこと、非日常的な空間であるがゆえに、社会性によって規定される道徳もまた通用しない。一人称という偏った語りの形態において、戦争がもたらした内面の混沌を批評の対象とすることによって相対化し、記録化していく。これが『俘虜記』というテクストが小説性の中に記録性を帯びているといわれる理由であり、『俘虜記』の語りの最大の特徴であると言えるだろう。大岡は「歴史」は「語る」ことによって変化するという問題意識を抱えていたが、『俘虜記』はまさに「語り」の問題に、「記録」という問題が付加された小説であると言えるのだ。

二、「レイテ戦記」の手法

『俘虜記』の中で追求された手法とは、一人称という偏った語りを用いた相対化がどこまで可能なかという、「文学」における「歴史」の「語り」の問題であった。一人称による相対化とは、それが一人称によって行われる限り、常に疑いをはらむという意味において、限界を抱えざるを得ないのである。そこで大岡が執筆したのが、太平洋戦争におけるフィリピン島での戦いを、三人称を用いて語った『レイテ戦記』である。

『レイテ戦記』は『俘虜記』『野火』に続く文学作品として扱われている。分量は、全集では二巻（岩波書店『大岡昇平全集』九巻、十巻（一九八三年）、筑摩書房『大岡昇平全集』九巻、十巻（一九九五年））、文庫では三巻（中央公論社『レイテ戦記』上、中、下（一九七四年））に渡っている。『レイテ戦記』は、『俘虜記』や『野火』と比較すると明らかに大著であるといえる。『レイテ戦記』をこのような大著にしているのは、「歴史的事実」に対する言及の数々である。膨大な「歴史的事実」に対する言及こそが、『レイテ戦記』を、単純に「小説」と分類してしまうことに対し、疑問を生じさせる要因となっている。

『レイテ戦記』は三人称によって展開されるテクストであるが、三人称による語りとは、一人称によって行われるそれよりも客観性が増すと考えられている。しかし三人称が完全な客観性を勝ち得ているかという点、実はそうではない。「神の如き視点」に近い客観的な語りがいられる一方で、登場人物に沿った語りを展開する場合もある。『レイテ戦記』も決して例外ではない。

『レイテ戦記』は四つの語りを用意している。第一に戦闘の経緯を説明し、『レイテ戦記』を動かしていく箇所、第二に資料を用いて解釈を導き出す箇所、第三に三人称の語りの中に「私」という主観的な語りが登場する箇所、第四に登場人物の視点に寄りそった語りを展開される箇所である。第一、第二の特徴は、徹底的に意味付けと価値判断を排除し、俯瞰的、巨視的な角度から淡々と記述するところにある。第三、第四の箇所は通常の小説に用いられる手法を用いて記述される。つまり、第一と第二の箇所と第三と第四の箇所が混在していることこそが、『レイテ戦記』の独自性を示す箇所であると言える。とりわけ、第一と第二の箇所は、常に歴史小説がさらされる「事実」と「虚構」の曖昧さという批判を回避することを意図した手法であり、歴史小説における「事実」と「虚構」の曖昧さを自覚していた大岡の用意した仕掛けであると言える。

第一にあげた『レイテ戦記』戦闘の経緯を説明する箇所として、例えば次のような記述がある。

十四日朝、〇九三〇、三ツ瘤高地（一五二五高地）にあった米一九連隊の一部が、二二連隊本部にはじめて連絡した（スプ ラギンズ大隊は九日以来、二二連隊の指揮下に入っていた）。一〇三〇連隊の情報班小隊がB中隊の占拠するY高地に進出し、リモン部落西方一帯の偵察を実施した。一一〇X点にあったF中隊は日点の連隊本部まで後退した。一一二〇第三大隊が右翼第一大隊と交替した。第一大隊はこの時までY—aの線に進出し、その任務を終了していた。

（『レイテ戦記』十四「軍旗」）

引用箇所からも明らかなように、戦闘の経緯を説明する記述から

は、意味付けや価値判断が排除されている。このような通常の小説に用いられる手法とは異なる記述のあり方こそが、『レイテ戦記』が「面白くない」あるいは「戦史的」とみなされる要因となっているのである。¹¹³

意味付けや価値判断が排除された記述のあり方で問題となるのは、語り手の位相である。この点について柴口順一氏は以下のように述べている。

戦闘経過の記述は基本的には作者と認識される記述者が記述していく表現と捉えることができるのである。われわれはむしろそのような記述者の視点にたつて読むことになる。だが、明らかに作者と認識されることでの記述者とは、語り手といった内包されたものではなく、また作品において記述の対象ともなっていない。すなわち作品のいわゆる登場人物でもなかったのである。その意味でそれは記述の決定的な外部に存在する、というよりはその記述こそいわばその外部からやってきたものであったといえるであろう。¹¹⁴

柴口氏はここで「記述者」という言葉を使用しているが、柴口氏は、『レイテ戦記』は作品の登場人物の一人によって語られるのではなく、作者がそのまま「記述者」＝語り手となり、その語りとは常にテキストの外側からやってくることを指摘している。そもそも語り手とは作者が準備した仕掛けであるから、作者＝語り手とは言えないが、戦闘経過を説明する箇所は、テキストの内部に位置する登場人物に語らせないことよって、巨視的な角度から語ることに成功しているということであろう。

大岡は「レイテ戦記」の意図¹¹⁵の中で次のように述べている。

すべては数え切れないほどの原因の結果起こっているの、それらを巨頭的に高いところから見渡すのでなければ、戦争を書いたことにはならないと思っていました。私がこんどの「レイテ戦記」で試みたのは、そういう風にいわば大きな壁画のように戦争を描くことでした。

『レイテ戦記』は、戦闘経過の説明というテキストの大部分を占める記述において、「巨頭的に高いところから見渡す」視点をを用いることによって、客観的かつ相対的に語ることを試みているテキストであると云える。ある記述を行う際、主体を設けると、主体は常に相対化の対象から免罪されることになる。つまり、外部に位置する語り手という、内包されない視点を持たないことがすなわち、「歴史」を語ろうとする際、その主体が免罪される危険をなるべく排除しようという相対化の手法であったのだ。『レイテ戦記』はこの意味において、「自己物語世界的」手法をもちいて相対化の手法を追求した『俘虜記』や『野火』の語りとは、決定的な違いがあると言えるだろう。

「私」という登場人物の一人でもある語り手を設けた『俘虜記』が、「私」の視点に固定された語りを展開するのに対し、『レイテ戦記』の記述は、巨視的な角度から、相対的な記述を試みている。例えば次のような箇所である。

「飛行場設定援助」とは、工兵だけではなく、歩兵砲兵その他あらゆる兵科を挙げて飛行場設営に当る意味である。これは沿岸防禦陣地構築がそれだけおくれることを意味する。銃を取って戦うべき歩兵にもっこ担ぎをやらせるのは、部隊長として堪え難い、と各隊長は口を揃えていった。工兵、衛生兵も

また白兵戦闘訓練を要望した。

この作戦に関し、黒田十四軍司令官は一つの意見を持っていた。

「ソロモン方面の実績を見て、彼我生産力の差はいかんともし難い。航空要塞を作って抵抗しても、いつか差が一〇対零になる時が来る。その時は陸軍が地上戦闘をやらなければならぬ。飛行場は敵のために作ってやるようなものだ」

〔『レイテ戦記』一「第十六師団 昭和十九年四月五日」傍線論者〕

先の引用部は、黒田十四軍司令官の意見を挿入することにより、飛行場設定援助計画について、連隊長の間に漂う否定的な声があったという「事実」を、より巨視的に記述しようと努めた箇所である。さらにここで語り手は、「これは後に山下大将も踏襲する作戦で、大局的には現状に適合していたといえる」と、黒田十四軍司令官の意見を肯定的にとらえつつ、一方で「しかし十九年六月の時点で、比島全域にこの作戦を拡大するのは、難局に当って、安易な消極的解決を図ることではない」と、黒田十四軍司令官の意見の適切、不適切を判断することにより、黒田十四軍司令官の意見という主観性の高い記述を相対化してみせたと云える。

『レイテ戦記』における戦闘の経過を説明する箇所とは、先に見てきたように、常に巨視的な角度から淡々と語られる、相対的な記述であると言える。このような語りの在り方とは、「歴史記述」の語りの在り方と同様であると言えるだろう。「歴史記述」における語りの手法とは、複数の史料を突き合わせ、史料批判を行うことにより、なるべく相対的に記述していかうとする手法であると考えら

れているからだ。²⁶したがって、戦闘経過を説明する箇所は、語り手によって歴史記述生成の手法と同様に記述されていると言える。

その一方において、『レイテ戦記』には、戦闘経過を説明する際に、歴史記述生成の手法を採りつつ、その原則から外れる例外的な箇所がいくつか散見する。例えば次のような箇所である。

十九日早朝、ミンダナオのダバオ基地から飛び立った海軍艦上爆撃機彗星は、〇八三〇次のように報じた。(中略)

十七日、海軍中将大西瀧治郎が第一航空艦隊長官としてマニラに赴任した。彼は来るべき海上決戦に参加すべき一航艦が少なくとも一〇〇機はいると思っていたのに、それが三〇機に満たないのを知って愕然とした。(中略)

寡勢をもって有効な攻撃を行うためには、かねて大本営で研究中の特別志願による体当り攻撃を、直ちに実行に移すほかはないと考えた。

以来日本空軍の主要攻撃方法となる体当り特攻が誕生したのはこの時である。零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせて、飛行甲板に体当りさせようというのである。いずれレイテ沖海戦についての章で詳述するつもりだが、さしあたり二十日大西長官が発した命令を記録しておく。

〔『レイテ戦記』七「第三十五軍」傍線論者〕

ここでは「十九日」「十七日」「二十日」とで時系列が前後して記述されていることに気づかされる。また、神風特別攻撃隊が編制された件について、「第三十五軍」の章において資料を引用して説明を施しつつも、特攻隊員が選出された経緯などの詳細については、「神風」の章で別の資料を用いながら再び記述される。このように、

『レイテ戦記』では、「事実」が前後して挿入されることが珍しくない。一般的に「歴史記述」とりわけて年代記の類とは、時系列に沿って説明されるものである。一方の『レイテ戦記』は、時系列という「歴史的事実」を説明する上で最も有効な関係性を排し、あらゆる「事実」や「事実」に関連する資料を同一平面上に置き直し、そこから説明を行っていくのである。つまり、『レイテ戦記』に用いられている説明の手法とは、厳密な時系列の有無という点において年代記とは異なる記述の手法であると言えよう。「歴史的事実」を巨視的な角度から、語り手の価値観や意味付けを徹底的に排除する語り手法を用いしつつ、単純な年代記とは異なった記述を行った箇所こそが、『レイテ戦記』を執筆する上で大岡が腐心した箇所であったのだ。

続いて、資料を用いて解釈を導き出す箇所について論じたい。解釈とは、『広辞苑第六版』(二〇〇八年一月)によると「文章や物事の意味を、受け手の側から理解すること。また、それを説明すること」であり、したがって語り手の価値判断が表出する箇所であるとも言える。しかし『レイテ戦記』は、この解釈が一方的かつ単一的な解釈にならないよう、常に相対化を試みている。この点について考えるにあたり、比島沖海戦(『レイテ戦記』では「比島沖海戦」と表記されているが、他に「レイテ沖海戦」または「フィリピン沖海戦」とも呼ばれる)を描いた場面に注目したい。

比島沖海戦とは、一九四四年十月二十三日から二十五日にかけて、日本海軍とアメリカ海軍の間で行われた海戦を指す。この一連の海戦においてよく知られるのが、栗田健男中将率いる第二艦隊(以下「栗田艦隊」という)が行った「謎の反転」である。「謎の反転」とは、一九四四年十月二十五日、日本海軍が「捷一号作戦」の一貫と

して行つた一連の比島沖海戦において、小澤艦隊率いる本隊の陽動によりレイテ湾に集結した米国揚陸艦隊を攻撃することを目的とした海戦の終局で、その任務を負っていた栗田艦隊が反転・撤退したことを意味する。この「謎の反転」によって、レイテ湾突入後、栗田艦隊とともに敵上陸部隊を攻撃するはずであった第一遊撃部隊第三部隊（以下「西村艦隊」という）は、単独で突入することになった。この「歴史的事実」について、『レイテ戦記』は、「この単独突入決意については、日米軍事評論家の間で議論が分れている」とした上で、資料を分析しながら次のように記述する。

① ジェームス・A・フィールド Jr. はハーバード大学出身の若い歴史家で、海軍少佐、航空戦隊参謀として翌日のサマール島沖海戦に参加した。戦後米戦略爆撃調査団の一員となつて日本へ来て、関係将官を訊問した。訊問は十分礼儀を尽して行われ（恐らく昭和二十年十月の時点で、元海軍軍人が受けた最大の尊敬である）、みな生々しい記憶の下に答えていて、その報告は最も信頼出来る史料の一つである。

フィールドはこの資料、その他に基いて、一九四七年「レイテ湾の日本艦隊」（中野五郎訳、昭和二十四年）という本を書いた。（中略）彼は西村艦隊の猪突を重大な作戦上の過失と見ている。

（『レイテ戦記』九「海戦 十月二十四日—二十六日」）
 ② これに対して日本人の立場から反論したのは伊藤正徳「連合艦隊の最後」（昭和三十一年）である。（中略）伊藤は西村中将の行動は、栗田艦隊の重荷を少しでも早く軽くしてやるという感情的理由に基づくとしている。

（『レイテ戦記』九「海戦 十月二十四日—二十六日」）
 ③ これに対してもう一つの反対は、モリソンの『第二次大戦海戦史』の「レイテ」（一九六六年刊）の説で、西村艦隊の行動は、二十四日一八一三（一九五七再電）の豊田聯合艦隊司令長官の「全軍突撃」命令に基いた正しい行動だということ。〇四三〇から日本軍の「黎明」に入るのだから、別に突入を早めたわけではない、予定のペースで進んだだけだ、という。
 （『レイテ戦記』九「海戦 十月二十四日—二十六日」）
 『レイテ戦記』はこのように三種類の資料を引用し、それぞれ分析を行つた結果、「厳密に因果関係をたどるなら、西村中将に死に急ぎの決意をさせてしまったのは、栗田艦隊の遅延が原因ということが出来よう」との結論を導き出した。

栗田艦隊の行つた「謎の反転」については現在でも諸説別れているが、『レイテ戦記』は「栗田艦隊の遅延が原因」という一つの解釈を導きだすために、日米双方の「資料」を少なくとも三種類引用した。一つの解釈を常に複数の資料をもつて相対化しようとする手法こそが、膨大な資料を背景に成立する『レイテ戦記』の特徴なのである。『レイテ戦記』における解釈の相対化について考察するにあたり、菅野昭正氏の指摘を引用してみる。

ある事実についての解釈を一方の極に追いつめたのち、それと対照をなす極を想定して中点へもどってゆく。（以下略）
 菅野氏の指摘は、解釈の相対化を行うに際しての、資料の扱い方に対する言及であるともみなすこともできるだろう。『レイテ戦記』は公的な史料をはじめ、回想録や随想、インタビューといった数多くの「テキスト」を使用している。それは『レイテ戦記』という一

つの大きなテキストの中で、様々な「テキスト」群が互いに影響を与え合っていると考えることも可能なのである。『レイテ戦記』は必要な「テキスト」を引用し、影響関係を発生させることによって、自らの解釈を相対化しようとしているのだ。

また、一つの解釈を、複数の資料を用いて相対化しようとする手法は、「歴史的事実」を客観的に記述しようとする試みにも応用される。例えば次の箇所である。

この日、ルソン島のクラークフィールド飛行場群は延二〇〇機の米艦上機の攻撃を受けていた。ところがわが方には台湾沖航空戦から生き残った第一航空艦隊の三〇機、第四航空軍の五〇機しかいなかった。陸軍機二〇、海軍機五が空襲の間を縫って飛び上り、レイテ湾に達した。陸軍機が戦艦三、輸送船三に、海軍機が戦艦二に命中弾を与えたと報じた(米側の記録によれば、護衛空母一、救難艦一が水平爆撃により損傷)。

上陸日の二十日には、セブ、レイテのほかに空襲はなかった。クラークフィールドの海軍機五がレイテ湾内にあった輸送船一を撃沈し、護衛空母二に命中弾を与え、陸軍機一四が巡洋艦二、駆逐艦一を損傷したと報じた(米側の記録によれば軽巡一航空魚雷により損傷)。(『レイテ戦記』七「第三十五軍」傍線論者)

ここでは当時の日本が「事実」として報道した事柄を優先して記述しつつも、米軍側に記録されている「事実」を、括弧書きを用いて補っている。当時、日本が公式に発表した情報の中には虚偽にあたるものも少なくない。『レイテ戦記』は「事実」とされたものの中にも時として危うさが存在することを理解した上で、敢えて二つの「事実」を対置させているのである。つまり『レイテ戦記』は、「歴

史的事実」をより客観的に記述するため、複数の資料を元に導き出された複数の解釈を提示し、「中点へ戻ろう——相対化しよう——」としていると言えるだろう。それは、できるだけ客観的に「歴史」を再構築しようとする試みでもあったのだ。『俘虜記』や『野火』で用いられてきた「事実」と「事実」の突き合わせによる相対化という手法は、『レイテ戦記』で解釈の相対化、「事実」を相対的に記述するという二種類の手法に取り入れられることによって、より確実に結実していくのである。

前述のように『レイテ戦記』は相対的・客観的な記述、解釈を追及したテキストである。ところが『レイテ戦記』には、「私」という語り手が突如として現れ、「歴史的事実」や資料に対して、主観的な解釈を加える箇所も存在するのだ。これが、『レイテ戦記』の語りにおける第三の特徴である。

通常、三人称の語りによって進行するテキストでは、一人称の語りよりも客観性が増すと考えられている。ところが、「語り手は信用できない」という言葉が示すとおり、三人称の語り手が語ることにすべて正しいというわけではない。語り手自身が「歴史的事実」を、偏見をもって解釈している可能性は十分に存在するのである。『レイテ戦記』が、先に指摘した第一、第二の語りの方法を用いることによって、客観的かつ相対的な記述を目指しつつ、一方で「私」による主観的な意見を織り込むのは、歴史小説における「事実」と「虚構」の曖昧さを回避する効果を狙ったからではないだろうか。『レイテ戦記』で「私」が登場するのは、例えば次のような場面である。

玉井副長が大尉に計画を打ち明けた時の模様は、次のように

伝えられている。

「関大尉は唇を結んで、何の返事もしない。両ひじを机の上につき、オールバックにしている長髪の頭を両手で支えて、眼をつむったまま俯向き、深い考えに沈んでいった。身動きもしない。——一秒、二秒、三秒、四秒、五秒……。」

と、彼の手が僅かに動いて、指が髪をかき上げたかと思うと、静かに頭を持ち上げて云った。

『是非、私にやらせて下さい』(傍点原文)

少しの澁みもなかった。明瞭な口調であった(中略)

むろんパイロットは常に死の覚悟が出来ていなければならぬ。殊に米軍の航空戦力と対空射撃が強化されたこの頃では、出撃はほとんど死を意味した。三度は帰還しても、四度目には撃墜される。しかし生還の確率零という事態を自ら選ぶことを強いられる時、人は別の一線を越える。質的に違った世界に入るのである。

戦闘の経過の中では、人はこの一線は案外すつと通り越す。被弾した航空機のパイロットにとって、自爆は避けられぬ死をいさぎよく飾ることであり、憤怒の感情を解放することである。壕内にとび込んだ手榴弾を体でかばって、僚友の身代りになるような献身的行動が反射的に取られることがある。しかし基地の兵舎で、特攻と決定してから出撃までの幾日かの間、あるいは飛び立ってから、目標に達するまでの何時間かの間は、人間に最も残酷な生を強いる、と私には思われる。

『レイテ戦記』十「神風」 傍線論者

この場面は、神風特別攻撃隊第一号として認識されている関行男

大尉が、特攻要員に選出された際の様子について書かれた箇所である。『レイテ戦記』はまずはじめに、猪口力平、中島正『神風特別攻撃隊』から、関大尉が特攻に選ばれた際の様子を引用している。続いて、パイロットは常に死を覚悟しているとしながらも、特攻という前代未聞の攻撃によって散華していかなければならないことに対し、「人間にもつとも残酷な生を強いる、と私には思われる」と意味付けている。ここで三人称によって進行する『レイテ戦記』に、突如として「私」という一人称の、主観的な存在が姿を現すのだが、『レイテ戦記』における「私」を称す存在とは、『俘虜記』や『野火』と異なり、自身が内包され、批評される対象となっているわけではないという点において異質である。

『レイテ戦記』において「私」や「筆者」という人称が登場する箇所は、全部で四十箇所余りに及ぶ。その特徴は、「歴史的事実」や、資料に対し何らかの批評や説明が行われ、「私」なりの解釈が提示されるということだ。先に引用した「人間に最も残酷な生を強いる」というのも、厳密な資料の批評から来る解釈というよりは、資料を超えた先にある、人間への深い洞察から導き出される解釈であると見える。

『レイテ戦記』が大著であることを加味すると、「私」の登場回数には決して多いとは言えない。『レイテ戦記』は三人称の記述に終始するため、できる限り「私」の存在を抑制したとみなすこともできよう。一方で、さほど頻出してはいないからこそ、「私」の存在を全面的に削除することも可能であったのではないだろうか。つまり、『レイテ戦記』は、「私」による主観をなるべく抑制しつつも、あえて、数十箇所において削除せず、主観的な意見を折り込むことを行っ

たと考えることができるのである。「私」による主観の出現とは、戦闘経過を説明する箇所、資料を用いて解釈を提示する箇所における語りの客観性を保障する意味があり、なおかつ巨視的な視点を用いた相対的な記述、あるいは資料によって相対化される記述によっては補うことのできない箇所を紹介しよう——語ろうとした結果なのではないだろうか。

『レイテ戦記』には三人称によって記述される客観的な記述と、「私」による主観的な解釈が存在している。その一方で、三人称による内的焦点化を利用した「兵士側の主人公格たるべき存在」が描かれることもある。例えば、以下の箇所である。

井畑敏一等兵は和歌山県那賀町の土建業者で、十八年召集、第五十四飛行場中隊に属し、十九年六月以来ブラウエン南飛行場（バユグ）の地均しに従事していた。（中略）

井畑一等兵が壕へ入ってしばらくすると、坂の下に二台の戦車が現われた。弾も来た。戦車は坂を登るつもりらしかった。カタピラの音は、この近さで聞くと、ガラガラというしわがれたような音に変っていた。

彼の知らないほかの部隊の兵士が、坂の上に現われた。（中略）
「そのうち戦死する奴が出る。そいつのを使え」と分隊長がいった。

日が暮れると、分隊長は、
「もう大丈夫だ。アメ公は夜は来やしねえ、上へあがろう」といって、壕を出た。小屋の裏の林の中で、飯盒半分の飯を炊き、レイテ島に着いて以来、はじめて満腹感を味わった。

〔レイテ戦記〕八「抵抗」

分隊長の声を聞いたのは井畑一等兵であり、満腹感を味わったのも井畑一等兵だ。この場面は戦闘経過を説明する記述とは異なり、明らかに井畑一等兵の視点に寄り沿った「語り」であり、読者もそれを強く意識して読む。柴口氏は次のように指摘する。

もちろんこの部分は、喉笛を撃たれ唾になって帰還した井畑敏一なる人物が語った、というより唾になってしまったのだからたぶん書いたものを、作者大岡昇平がいわばリトライしたものであろう。だが表現としては、井畑一等兵の視点にたついでゆる語り手によって語られたものと捉えなければならぬのである。⁵⁴

『レイテ戦記』の大半は外部に位置する語り手によって、常に俯瞰的、あるいは巨視的に紡がれていた。いわば、作品の登場人物でもある井畑一等兵に寄り沿った語りの在り方こそが特異であると言えるだろう。しかし、一兵士の視点に寄り沿った語りは、井畑一等兵の例に限らず、度々登場してくるのだ。井畑一等兵は、「喉笛を横から貫かれ、かすれ声しか出なくなった」。これによって井畑一等兵の視点は作中から消えていく。文学作品においては、作品の中に語り手が内包されること自体はそう珍しいものではない。問題となるのは、外部に位置する語り手によって、常に巨視的な角度から、客観的な記述が行われる『レイテ戦記』の中に、井畑一等兵のごとく消えていく名もない命——視点を内包しているということだ。『レイテ戦記』は内的焦点化を用いることによって、レイテ島の戦いという一つの「歴史的出来事」を記述するに際し、外側からは描くことが不可能である、ありとあらゆる記述を共時的に挿入すること意図したのではないだろうか。それはつまり、記述のさらなる相対化

を意図するとともに、巨視的な語りでは捕らえることのできないものを描こうとする、「語り」の在り方を模索した結果でもあると言えるのである。

『レイテ戦記』にて複数の視点が用いられる意味は、客観的かつ相対的な記述が介入できない箇所——記述の空白を内的視点によって埋めようとする作業に外ならなかったのである。『レイテ戦記』が強い記録性を指摘されながらも「文学」としての価値を保つのは、「歴史記述」と同等の記述を行いながらも、その記述の中に「小説」の枠組みであるからこそ実践できる手法を用い、そして一兵士に寄り添うことによつて、単なる「歴史的事実」の記録から、その現場を生きて死んでいった人間の記録という、極めて文学的な主題を内包することに成功しているからでもあるのだ。

おわりに

『俘虜記』では、「私」という一人称の語り手を用いることにより、自らが見たこと、聞いたことを詳細に語り尽くした上で、それらをさらに批評することを試みている。このような語りの在り方とは、「一人称相対叙法」に該当すると言えるだろう。「一人称相対叙法」とは、単一の視点で切り取られ、客観性を欠きがちである一人称を用いながらも、徹底的な観察と批評、「事実」と「事実」の突合せを繰り返すことによつて相対化を試みる手法である。特に『俘虜記』では、「自己」の心理や思考の流れすら相対化の対象とすることにより、戦争下における人間の内面をも相対化することを試みている。これこそが、「事実」として残りにくい人間の動機や心情を相対的に叙

述する方法であると言え、『俘虜記』の語りの特徴でもあるのだ。

一方で、三人称の語りによつて展開される『レイテ戦記』は、『俘虜記』とは明らかに異なる語りを用意している。『レイテ戦記』の語りは四つに細分化され、戦闘経過を説明する箇所、複数の資料をコラージュ的に用いて解釈を提示する箇所では、徹底的に意味付けと価値判断が排除しつつ、単なる年代記とは異なる叙述を施した。このような手法こそが、歴史小説は「事実」と「虚構」の境界を曖昧にするという批判を回避するための手法であり、歴史小説における叙述の客観化、相対化を極限まで追求した結果であると言える。

また、『レイテ戦記』は徹底的な客観化、相対化を試みる反面、主観的な語りを用いる箇所、内的視点をを用いることによつて、客観的記述では及ばない箇所を語ろうとする試みも内包されている。つまり『レイテ戦記』には、「歴史記述」に近い語りの手法と、通常の文学的な語りの手法が混在しており、これこそが大岡が導き出した叙述の客観化の手法であったと言えるだろう。

※引用文は、『俘虜記』は『大岡昇平全集 第二巻』筑摩書房(一九九四年十月)及び『俘虜記』新潮社(一九九三年二月)、『レイテ戦記』は、『大岡昇平全集 第九巻』筑摩書房(一九九五年六月)、『大岡昇平全集 第十巻』筑摩書房(一九九五年七月)に拠る。

註

(一) T・イーグルトン著／大橋洋一訳『新版 文学とは何か』岩波書店(一九九七年二月)三頁～四頁

- (二) 堀井正子「作品の小説性と記録性について——『俘虜記』の場合——」『国文学 言語と文芸』第九五号 桜楓社（一九八四年六月）
- (三) 『レイテ戦記』が戦史的であるとみなされる要因について、柴口順一氏は『大岡昇平と歴史』翰林書房（二〇〇二年五月）の中で次のように説明している。

先に引いたような戦闘経過の記述は、量的にいつてもこの作品のかなりの部分を占めている。そればかりでなく、それはこの作品の歴史記述としてのいわば根幹をなす記述であるともいえるであろう。（中略）もはや明らかなことと思うが、『レイテ戦記』が一般におもしろくないと感じるその大きな要因は、先のような戦闘経過の記述がこの作品には大量に存在するからであろう。

『レイテ戦記』における戦闘の経緯を説明する記述とは、通常の小説に用いられる語りとは異質であることとらえることができるだろう。

- (四) 柴口順一『大岡昇平と歴史』一二五頁～一二六頁
- (五) 大岡昇平『レイテ戦記』の意図『日本文芸論集』第二号 山梨英和大学（一九七〇年三月）
- (六) 小田中直樹『歴史学ってなんだ？』PHP研究書（二〇〇四年二月）三五～三八頁
- (七) 菅野昭正「環境と個のドラマ（続）——大岡昇平論」『中央公論』第八七巻第九号 中央公論新社（一九七二年九月）
- (八) 柴口順一氏は、『大岡昇平と歴史』の中で、森鷗外『伊沢蘭軒』における「私」の登場回数と比較し、『レイテ戦記』における「私」の登場回数は極めて少ないとしている。
- (九) 亀井秀雄「個我的集合性——大岡昇平論（I）——」『群像』第三二巻第七号 講談社（一九七六年七月）一七六頁
- (十) 柴口順一『大岡昇平と歴史』一二二～一二三頁